

第 1 回委員会の確認

1. 第 1 回委員会で検討した事項

(1) 学研都市における現状と課題（提言）

1) 学研都市における現状の課題

- ①都市としての総合力の発揮が不十分
- ②都市の賑わいや機能の不足
- ③クラスター整備の遅れ
- ④交通基盤整備における課題

2) 求められる新たな時代の課題

- ⑤新産業の創出に向けた課題
- ⑥新たな文化の広がり、ライフスタイルの多様化に向けた課題
- ⑦国際化の著しい進展に伴う課題
- ⑧新たな都市の運営に関わる課題

(2) サード・ステージ・プランの検討テーマ

1) 「新たな文化・学術・研究の推進」

- ①新たな文化の創造を目指して
- ②新たな学術研究の推進

2) 「連携の強化、交流の促進」

- ①学術研究機能と生産機能の一体化、産学官連携の強化
- ②ベンチャーをはじめとした企業の育成
- ③世界各国との交流・連携の推進

3) 「学研都市の形成」

- ①多彩で魅力的な創造都市の形成
- ②未来を先導する都市の展開
- ③新たな観光の推進

4) 「都市基盤等の整備促進」

- ①都市基盤整備の推進
- ②交通基盤等の推進

5) 「都市運営の展開」

- ①高度な都市運営体制の確立
- ②近畿圏全体で学研都市を支える体制

2. 第1回委員会議事要旨

◆理念・位置付け

- ・構想段階から30年を経過し、時代変化に伴い、当初の理念に立ち帰り、守るべきところ、変えるべきところを整理。
- ・特徴を生かし今後の10年先の課題を見据えた、学研都市の目標（テーマ）が必要である。
- ・「一体性の確立」、「総合力の強化」は引き続き重要なテーマ。

◆文化・学術・研究

- ・近年国民の文化に対する意識が「文化施設への期待」から「文化活動への支援」にシフト、今後は様々なソフトを体系化することが必要。
- ・「地球環境」や「食糧問題」、また「情報」、「バイオ」など、持続可能な社会の実現に向けて、重点的に進めるテーマを立てていく必要がある。
- ・現地で情報技術を駆使して朱雀門の歴史情報を見せるなどして、文化スポットを展開し、文化面に貢献するようにする。
- ・観光を含めて平城宮跡を文化の中核として検討してはどうか。

◆連携・交流

- ・一定の生産機能を併せ持った研究施設の立地促進を進める必要がある。
- ・立地施設と大学、または市民との連携交流、クラスターの内と外との連携交流など、今後横断的な連携が必要。
- ・学研都市は広域的なクラスターとして推進する必要がある。
- ・オープンラボのような共同研究の拠点づくりにもっと力を入れ、求心力を持たせること。
- ・近畿広域の産業クラスター形成について、将来ビジョンに明確に位置付ける必要がある。
- ・日本の学術研究のコアとなるべきなのに国際化が進んでいない。「総合力の強化」に国際化の視点を加える必要がある。
- ・研究成果をあげると人が集まり、それが国際化への近道になる。

◆魅力的な創造都市の形成

- ・街の中での研究のための実証実験を推進すれば、関西の様々な企業が参加するのではないか。
- ・神戸の震災関連施設や大阪のUSJなどと連携しつつ、学研都市サイエンスツアーを企画することができないか。
- ・外国人が増える傾向があり、居住環境について整備を進めていく必要がある。

◆都市基盤整備

- ・豊かな自然環境を学び、研究することも必要。クラスター毎ではなく、学研都市全

体を総合的に研究することが必要。

- ・ 研究所立地を促進するには、「住みたい。行ってみたい。」という魅力が不可欠。立地側のニーズを反映した立地基準の緩和が必要。
- ・ 施設立地や居住促進には、クラスター開発と共に交通基盤の整備が不可欠。
- ・ あと10年で都市機構の都市基盤整備が概成するということも重要な条件。土地利用などについて柔軟な発想が必要。

◆都市運営

- ・ けいはんな学研都市について、知名度アップのための情報発信を。
- ・ バーチャルな連合大学院大学を作るなど、学研都市内の知識人を集める仕組み作りを進めてはどうか。
- ・ 世界中のサイエンスシティで競争、連携が行われているという認識を持ち、今後の運営管理の方策について、研究検討することが必要。
- ・ 例えば、行政特区として2府1県の新しい広域行政について検討できないか。

◆サード・ステージ・プランに向けて

- ・ 地元市町長の意見を取り入れる機会を設ける。
- ・ 平城遷都1300年記念事業を2010年について、プランに位置付けを。

3. 「サード・ステージ・プラン」の策定に係るスケジュールの確認

